様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００４３

研究課題名（和文）六朝隋唐道教における上清派の特質とその思想文化史的意義に関する研究

研究課題名（英文）Research on the characteristic and the cultural meaning of Shangqing-school in the six-dynasties and Sui Tang period

研究代表者
神塚　淑子（Kamitsuka, Yoshiko）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０１２６０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：上清派は、仏教対道教の論争においても仏教から批判されることは少なく、道教の中で特異な位置を占めている。本研究では、陸修静の著作と古霊宝経を検討し、上清の経典や斎法がもともと老子道徳経や霊宝経とは異なる特別な神聖性を有するものと認識されて上位に置かれたことを明らかにし、また、則天武后・玄宗期から顕著になる上清派の再興隆は、司馬承禎およびその弟子と交流を持った李白や顔真卿ら文人社会の志向と関連していたことを確認した。

研究成果の概要（英文）：Shangqing taoism is rarely criticized by Buddhism in the controversy of Buddhism vs. Taoism, occupying a unique position in Taoism. In this study, I investigated the writings of Lu Xiujing and the old Lingbao scriptures, I revealed that the Shangqing scriptures and rituals were originally recognized as having a special sanctity different from the Laozi-Daodejing and the Lingbao scriptures. In addition, I confirmed that the revival of Shangqing taoism which became prominent after the period of Wu Zetian and Xuanzong was related to the intention of literary society, such as Li Bai and Yan Zhenqing who have associated with Sima Chengzhen and his disciples.

研究分野：中国哲学

キーワード：道教　上清派　司馬承禎　陸修静　六朝隋唐時代

１．研究開始当初の背景

仏教と道教の論争が盛んであった則天武后の時代に僧玄嶷が著した『甄正論』には、道教に対する諸々の批判が記されているが、老子化胡説や霊宝経に対して鋭い非難が加えられているのに比して、上清派の陶弘景については、優れた人物として高い評価が与えられている。このことは、上清派が道教の中でも特異なものであると見なされていたことを示唆している。論争相手の仏教側からも高く評価される上清派とは、一体どのような存在であったのか、道教という枠組みを越えて、改めて深く掘り下げて検討する必要がある。

東晋中期に、江南の地において旧来の天師道に対する改革運動として起こり、新しい宗教的世界観と、得道のための方法論を提示した上清派についての先駆的な優れた研究としては、 Isabelle Robinet “*La révélation du Shangqing dans l'histoire du taoîsme*” (*École Française d'Extrême-Orient*,vol.CXXXⅦ,Paris,1984)があり、研究代表者も著書『六朝道教思想の研究』(創文社、1999 年)の第一篇「六朝時代の上清派道教の思想」において論じたことがある。個人的・天上志向的で心のあり方を重視する上清経は、集団的・地上的(現世的)で儀礼・戒律を重視する霊宝経とは異なる方向性を持っている。霊宝経に基づく思想と儀礼が隋唐以降の道教の実質的な主流となって長く継承されたのに対し、上清経の思想は文学や芸術の方面にも大きな影響を及ぼした。六朝時代に上清派が出現したことは、道教というものの幅を広げるという意味で、きわめて大きな意義を有していたと考えられる。

研究代表者は、前掲書において、東晋から六朝末に至るまでの時期の上清派と上清経の形成過程そのものに焦点を当てて研究を行ったが、上清派がその形成期において周囲からどのように見られていたか、あるいは、上清派がしばらくの衰退ののち再び興隆してくる唐代の則天武后・玄宗期において上清派の道士たちと当時の文人社会との関連はどのようであったのかといった問題については、まだ具体的な考察を行っていない。

上清派がその形成期において周囲からどのように見られていたかについては、近年の霊宝経の諸研究の成果をふまえた詳細な検討が必要となる。一方、上清派と唐代の文人社会との関連については、吉川忠夫氏の『書と道教の周辺』(平凡社、1987 年)に紹介されたような顔真卿の道教関係の諸碑文の文章が重要な資料となる。これらをふまえ、さらにまた、唐代における上清派の系譜の作成の動きにも目を向けた綿密な考察が求められている。このような視点からの研究を通して、道教史研究という枠組みを越え、六朝隋唐時代の思想文化史を、より立体的に把握することができるようになるものと思われる。

２．研究の目的

本研究の目的は、六朝隋唐時代の道教の中で特異な位置を占める上清派の思想とその系譜を文献資料と石碑などの文物資料の両面から綿密に検討するとともに、上清派の存在が中国思想文化史上において担った重要な意義について、儒教思想・仏教思想のみならず、文学・芸術などの諸方面を含めた広い視点から総合的に考察することである。具体的には、次のとおりである。

（１）陸修静（406~477）および古霊宝経において「上清」がどのように認識されているかを明らかにすること。「上清」は、道教経典を分類するときの枠組みである洞真・洞玄・洞神の「三洞」の中で最も上位の洞真に位置づけられている。この枠組みの形成に関わっているとされる陸修静についての研究は、上清派の研究のために欠かすことができない。陸修静については、すでにかなり多くの研究の蓄積がある。本研究では、先行諸研究の内容を検証しつつ、陸修静自身の著作のみならず、陸修静の「霊宝経目」にその名が見えるいわゆる古霊宝経において、「上清」がどのように捉えられているのかを明らかにする。

（２）則天武后期から 9 世紀初頭に至るまでの上清派の状況を、周辺の知識人・文人たちとの関わりを含めて明らかにすること。陶弘景ののち、上清派の活動はしばらく影を潜めるが、則天武后期から再び上清派の伝統への関心が現れてくる。その動きは、玄宗期の司馬承禎(647~735)の活躍によって顕著なものとなって李白の詩にも影響を与え、8 世紀後半には顔真卿によって「魏夫人仙壇碑」などの上清派の真人に関わる碑文が撰述され、貞元 21 年（805）には上清派の系譜を記した李渤の「真系」が世に出るに至る。李白と上清派の道士との関わりや、顔真卿の碑文についての先行研究を検証しつつ、則天武后期から 9 世紀初頭に至るまでの上清派と文人社会との関わりを再検討し、李渤の「真系」へと至る流れについて明らかにする。

３．研究の方法

（１）陸修静および古霊宝経において「上清」がどのように認識されているかを明らかにするために、陸修静の著作と古霊宝経を精読し、問題点を分析・検討する。その際、特に次の 2 点に留意する。

①陸修静は 5 世紀において道教の統合を図ることに尽力した人物であるが、それはどのような思想的・宗教的背景の中から出てきたのか、また、陸修静は洞真・洞玄・洞神の「三洞」の枠組みを用いて道教の統合を図ったとされるが、その内実は具体的にはどのようなものであったのか、それぞれ関連資料を精査しながら検討する。

②古霊宝経は現在、道蔵に収められるものと敦煌写本によって残ったものを合わせて約30篇あるが、その中には、上清派の神格や上清経の読誦について独特の解釈・説明が見えるものがある。それを手がかりにして、古霊宝経において「上清」がどのように認識されているかを明らかにし、東晋から劉宋にかけての時期に、道徳経や霊宝経・三皇文との比較において「上清」がどのような特徴を持つものと考えられていたのかを探る。

（２）則天武后期から9世紀初頭に至るまでの上清派の状況を、周辺の知識人・文人たちとの関わりを含めて明らかにするために、文学作品や石刻資料を含む関連資料を整理し、問題点を検討する。その際、特に次の2点に留意する。

①李渤の「真系」には、楊羲→許翻→許黄民→陸修静→孫遊嶽→陶弘景→王遠知→潘師正→司馬承禎→李含光という流れを記している。すでに指摘されているように、この継承関係は事実ではなく作為された部分を含んでいるが、どのような経過を経てこの系譜が作られることになったのか検討する。

②唐代の上清派のことを考える上で、司馬承禎の存在はきわめて大きなものであることは間違いない。司馬承禎の代表作とされてきた『坐忘論』をめぐる問題について検証する。

４．研究成果

（１）陸修静が「上清」をどのように認識しているかを検討し、「六朝道教と『荘子』―『真誥』・霊宝経・陸修静―」と題する論文の中で論じた。陸修静は、当時、中国社会に深く浸透してきていた仏教に対抗しうるだけの力を備えた道教を樹立するために、「三洞」の枠組みを用いて道教の諸流派を統合しようと試みた。陸修静は実質的には霊宝経の教理と霊宝斎の儀礼を中心に据えたのであるが、その一方で、上清経の収集にも情熱を注ぎ、「三洞」の枠組みの中では洞真上清を最も上位に置いた。また、『洞玄霊宝五感文』に見られるように、斎の分類においても、霊宝斎とは性格の異なる斎として「洞真上清の斎」を別に立て、「洞玄霊宝の斎」よりも前に置いた。陸修静のこのような「上清」重視の姿勢は、東晋中期以降の道教史の展開と深く関わっており、陸修静の事跡と著述の中でしばしば登場する『荘子』の思想が、この問題を考える上で一つの視点になり得ると思われるので、論文では、『荘子』の真人の観念や「心斎」「坐忘」の思想が、上清派道教と霊宝経においてどのように取り入れられているかを検討し、それらが陸修静の道教にもつながっていることを指摘した。

（２）古霊宝経の中で、「上清」をどのように認識していたのかをうかがうことが出来るのは、『太極真人敷霊宝斎戒威儀諸経要訣』と『太極左仙公請問経』(敦煌写本スタイン 1351)である。これらの古霊宝経では、上清経(大洞真経三十九章)を道徳経五千文・霊宝経と並んで最高の経典として尊重しつつも、その尊重のしかたが他のものとは異なり、道徳経五千文と霊宝経は常時用いることができて効用が期待できるのに対して、上清経（大洞真経三十九章）は修道の最終段階にだけ詠誦できるものとされており、地上の人間が軽々しく近づくべきではない、特別な神聖性を有するものと意識されていることを確認した。

（３）李渤の「真系」よりも前に上清派の系譜を記したものとして、次の4例がある。まず第１に、聖暦二年（699）ないしはそれ以前に書かれたと考えられる陳子昂「続唐故中岳体玄先生潘尊師碑頌」(『陳伯玉文集』巻５）には、華陽隠君（陶弘景）→昇玄王君（王遠知）→体玄先生（潘師正）→司馬承禎という流れが記され、上清派の系譜が記されたものとしてはこれが最も早い。第２に、司馬承禎の没後まもなく書かれたと考えられる衛憑「唐王屋山中巌台正一先生廟碣」には、元元（老子）→天師（張陵）→簡寂（陸修静）→貞白（陶弘景）→昇玄（王遠知）→体玄（潘師正）→司馬承禎という流れが記されるとともに、文中に「(体玄先生）他日以金根上経、三洞秘録、許真行事、陶公微旨、尽授于我尊師」とあり、許氏についても言及がある。第３に、天宝年間の初め頃に亡くなった道士胡紫陽のために書かれた李白の「漢東紫陽先生碑銘」には、三茅→四許→陶隠居→昇玄子→体玄→貞一先生→天師李含光・紫陽先生（胡紫陽）という系譜が見え、三茅・四許の語が現れている。第４に、大暦12年（777）に書かれた顔真卿「茅山玄靖先生広陵李君碑銘」には、上清真人許長史（許謐）・楊君(楊羲)→隠居先生（陶弘景）→昇玄先生（王遠知）→体玄先生（潘師正）→正一先生（司馬承禎）→玄靖先生(李含光）という系譜が見える。

これらの例から、上清派の系譜が意識されるようになったのは司馬承禎の存在が深く関わっていたと考えられること、司馬承禎およびその弟子たちと同時代の文人李白や顔真卿らが記した系譜には許氏や楊羲など上清派の出発点となった人物の名は見えるが陸修静の名は見えないこと、李渤の「真系」は李白や顔真卿らが記した系譜の上に陸修静と孫遊嶽を加えたような形になっていることなどを確認した。

（４）敬信・断縁・収心・簡事・真観・泰定・得道の七段階の修養を説く『坐忘論』は、唐代道教の修養論の代表作であり、その作者は司馬承禎であるとするのが長年にわたる定説であったが、近年、その定説を疑い、「唐王屋山中巌台正一先生廟碣」の背面に刻まれた「坐忘論」と題する短い文こそが司馬承禎の作であり、七段階の修養を説く『坐忘論』

は趙堅の作であるとする説が出てきた。この新説について諸方面から検討を行い、『坐忘論』の作者をめぐる研究の現状についてまとめた文を執筆した。これは近日中に刊行予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①神塚淑子
「京都国立博物館所蔵敦煌道経―『太上洞玄霊宝妙経衆篇序章』を中心に―」、『名古屋大学文学部研究論集』189（哲学 63）、査読無、2017 年、pp75～90
②神塚淑子
「六朝道教と『荘子』―『真誥』・霊宝経・陸修静―」、『名古屋大学文学部研究論集』186（哲学 62）、査読無、2016 年、pp55～81
③神塚淑子
「杏雨書屋所蔵敦煌道経小考」、『名古屋大学中国哲学論集』第 14 号、査読無、2015 年、pp43～68
〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
神塚　淑子（KAMITSUKA, Yoshiko）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１２６０３０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）